《研究ノート》

『民国日報』と大正維新—軍服を纏って行進した労働者達—

浜田直也

はじめに　問題の所在

今年は、大正一〇（一九二一）年の神戸川崎・三菱造船所の労働争議から一世紀である。賀川豊彦等が、一九二一（大正一〇）年六月から八月にかけて三万五千人といわれる労働者を組織し指導した神戸川崎・三菱両造船所の労働争議は、日本の労働運動史上の新紀元を切り開いた。

題目の「大正維新」とは、『労働者新聞』（大正八年六月一五日付）に神戸川崎造船所の職工熊谷弥一が寄せた時評に因んでいる。彼は、労働争議を明治維新の偉業に見立てたのである。

先行研究では、神戸の労働争議が情報媒体を通して、中国に衝撃的事件として伝えられた意義を考察したものは、管見の限り存在しない。

中国国民党（党首孫文、一八六六～一九二五年）の機関紙『民国日報』（一九一六年創刊）には、神戸での労働争議が詳細に報道されている。主筆は、中国同盟会（一九〇五年結成）以来の古参国民党員で中国共産党員でもあった邵力子（一八八二～一九六七年）である。紙面には、労働争議団の組織建とその闘争の実践、また争議団幹部の非日常的トピック（topic）がこまめに報じられている。[註1]

本論の主人公である謝晋青（江蘇省徐州の人、一八九三～一九二三年）は、『民国日報』の東京駐在記者で、その

筆先から争議の経緯が中国に向けて発信された。

ここで、初期中国共産党員の李大釗（一八八九～一九二七年）が、『読売新聞』の特派員記者であった丸山幸一郎（筆名昏迷、一八九五～一九二四年）に語った神戸川崎・三菱造船所の労働争議に関する談話を紹介することにする。[註2]

次に記すは、北京における労働運動研究家として知られている北京大学教授李守常（大釗）氏、及び其他四五の諸氏の意見を総合したものである（在北京昏迷生）

…而して日本の労働運動の欧戦開始以来、もっと適切に云へば此三四年来の進歩は実に驚嘆すべきものであった。昨年の経済界の変動と共に、労働運動が一時ずっと少なくなったのを見て、曩の労働運動は、好景気に附け上った労働者の盲動であった、と云ふやうな資本家の意見を時々新聞で見たが、吾々は日本の労働運動には相当注意して居り、又相当に理解しているつもりであるから、日本人の観察ではあるが、その観方は真に労働者の心事を洞察いている言ではない、争議の少なくなったのは、それからの運動が前のよりもより真の運動であることを雄弁に物語っているものであると考へていた。而して、最近神戸の争議を見るに及んで吾吾の観察が誤っていなかったことを知ると共に、一ヵ月以上にも亘って二万余の諸君がよく団結し、秩序正しく、堂々と横暴な資本家に対抗していたのに非常に敬服し日本の労働運動は既にあれまで進んだのだから、遠からず全国労働者の団結が成り、資本家に対抗するやうになるであろうと思って居る。（八月八日）

李大釗は、陳独秀（一八七九～一九四二年）とともに、一九二〇年七月の中国共産党結党に大きな役割を果たした。彼の発言を伝えた丸山は、無政府主義者の大杉栄（一八八五～一九二三年）や共産党の堺利彦（一八七〇～一九三三年）と交流し、李大釗を彼等に結びつけた社会主義者である。[註3]

つまり、李大釗の言葉から窺えることは、彼が新聞情報から知った神戸川崎・三菱造船所の労働争議の進捗に注目し、労働者が階級意識に目覚め革命に前進していく予兆と捉えていたことが窺える。

只、李大釗は、神戸の労働争議の情報をどの新聞を得たかを記していない。当時の中国の新聞の流通事情からして、

多数の新聞紙が流通していたのではない。その有力候補のなかにに『民国日報』があるのである。

本論では、まず『民国日報』に寄稿された謝晋青の労働争議に拘わる論説を紹介し、その論旨の信憑性を問う。そして彼の記者としての政治的スタンスを見極める。また、その報道が、孫文・李大釗・邵力子に伝えられた結果、日本の労働運動が中国革命にどの様な影響を与えたのかを検証する試論である。

第一章　謝晋青と高山義三の入営

謝晋青は、留日学生の時期に共産党の施存統（一八九九～一九七〇年）と交流があり、日本の警視庁によって「要視察支那人」に指定されている。彼は、神戸の争議が敗北した一九二一年八月に帰国している（「外秘乙第六四三号、要注意支那人謝晋青の行動、一九二一年五月」）。

また、当時の新聞の『国民新聞』（大正一〇（一九二一）年一〇月二五日付）に、次のようにある。

「福岡県警察部警部池田弘喜氏は、先頃突然上京、警視庁官房の各課を訪い何事か協議しつつあるが、仄聞する処によると右は福岡炭坑のダイナマイト窃盗事件に関連する社会主義者や不逞鮮人支那人等の捜査の為にて警視庁では暁民会一派の支那人羅豁・朱鳴田、コスモス倶楽部員謝晋青等に見込みを付け調査したが、三人とも既に帰国した後であったので、目下鮮人及主義者等に付いて内定（偵）中である。

謝晋青が属したコスモス倶楽部とは、おそらく一九二〇年一一月に発足したコスモ倶楽部の誤りであろう。コスモとはコスモポリタンの略で、アジアの被圧迫諸民族の解放を望む日本人と在京の朝鮮・中国人との意思疎通をはかるための組織である。[註4]

また、『彭湃同志生平年表』には、「1920年11月　日本人堺利彦和朝鮮人権無為等在東京発起組織“Cosmo Club”（宇宙社）、彭湃首先加入。」とある。[註5]

さらに、共産党の李達（一八九〇～一九六〇年）が、一九二〇年暮れに日本の警視庁でおこなった供述によれば、彼が堺利彦と最初に面談したのは、謝晋青の紹介によって朝鮮人某〔おそらく権熙国〕と同行の上、堺を訪問したという。[註6]

ここで本題に戻ると、一九二一年夏の神戸川崎・三菱両造船所の労働争議の前年、謝晋青が邵力子に報告したトピックのなかでも特筆されるのは、友愛会の高山義三（弁護士、一八九二～一九七四年）が一九一九（大正八）年一一月に一年志願兵として京都伏見の陸軍連隊に入営した記事である。

先述した『民国日報』社主の邵力子は、辛亥革命以来の古参革命家で、孫文（一八六六～一九二五年）とも親しく中国共産党の発起人の一人でもある。[註7]

邵力子は、『民国日報』（一九二〇年十二月二日付）に「宣伝的模範」を寄稿し、高山の入営を紹介している（傅学文編『邵力子文集』上冊455頁）。

今天我接謝晋青君來信、其中有〝随感録〟一則、很使我感想到青年応怎様做宣伝的工夫、他説：〝日本有覚悟的青年、向來都是很恨当兵的、然而那是国家的法律、不得幸免、所以很不高興。近来社会党人、却不是這様。一到了服兵年届、都踊躍入伍。他們以為〟従前想向軍人宣伝主義、苦無機会、入伍就是很好的機会、為什麼不去宣伝呢？〝這様一來、官憲対于社会党人入営、又都害怕起来了。…〟大家試看：日本青年為了宣伝主義的縁故怎様努力？日本軍閥的圧力、十分厳重、要向軍人宣伝主義、談何容易？　但是他們還是決心去做、可見他們只抱着〝有志竟成〟的目的、不顧什麼困難。覚悟者呀！　你們不応当如此鳴？往民間去！　往民間去！。

文中の〝日本有覚悟的青年〟とは、高山義三のことである。謝晋青は、「向軍人宣伝主義」と記し、高山の入営の目的を軍隊へのプロパガンダ（宣伝）と伝えている。また、謝晋青は、高山をナロードニキ（人民主義者）の姿に重ね合わせて、その軍隊への入営を日本の軍国主義の衰退の兆しの可視化と語っているが、事実は牽強付会の曲解報道である。

高山の入営は、当時の巷間の話題となり、友愛会員の中でも彼の軍隊内での動静がもてはやされ、神戸の友愛会の機関紙『労働者新聞』に掲載されている。[註8]

友愛会理事高山義三君が昨冬輜重兵一年志願兵として入営した。送別演説会を開いたり、入営の時には会員が会旗を捧げ労働歌を高唱して勇ましく送っていたそうだ。最近同志へ軍服を着て笑っている写真を送って来たが、其の横に「苦笑か微笑か」と書いてあった。今頃は神妙に馬の尻でも洗っているだろう。

高山は、京都帝国大学法学部の在学中に河上肇（一八七九～一九四六年）の薫陶を受け京都労学会に参加した社会運動家である。彼は、京都ＹＭＣＡ会員でもあり賀川豊彦が救済活動に取り組んでいた神戸新川の貧民窟を度々訪れ親交を温め卒業後に友愛会員になり活動している。

高山が志願した理由は、軍人になることで京都労学会と友愛会に対する官憲の監視の目を逸らす効果を期待したものである。

これに拘わって、当時、同志社大学教授・櫛田民蔵（一八八五～一九三四年）は、京都労学会が官憲の憚るところであったことを懸念する想いを機関紙『新神戸』に披瀝している。[註9]

我国に於ても、最近友愛会所属の労働者の一部と、官私大学学生の一部とが結合して「労学会」なるものを組織するに至ったが、その結合はむしろ自然であり、又文化の発達の上に歓迎すべきである。然るに、この「労学会」なる名称は「労兵会」と語呂の似通ふ所から、我が官憲は、かやうな名称の会合は穏やかならずとて、曩きに東京に成立の労学会に警告を与へたとか、解散を命じたとか聞いて居るが、これこそ穏やかならぬことである。「労兵会」は労働者と兵士との結合で、武装した労働者の一団であり、従って危険と云へば、勿論危険ではあるが、「労学会」は、労働者と学生の結合であり、従って啓蒙的ではあるが、武装的にあらざるは勿論、之が危険呼はりは文化の進展を遮止するものである。

そもそも、高山義三は、クリスチャンで共産主義者とは一線を画していて、あくまでも人道主義・人格主義の立場

から労働運動に身を投じたのである。当時の京都ＹＭＣのメンバーであった伊藤佑之（四国学院短期大学監）は、次のような回想を残している。[註10]

当時東大の新人会と並んで、京大には労学会があり、わが国の学生社会科学研究会のさきがけをなしておりました。それは労働問題を研究する学生の会で、河上肇博士を中心とし、古市春彦（五高出）、高山義三（五高出）、水谷長三郎（三高出）、小林輝次（三高出）、松方三郎（学習院出）、赤松五百麿（三高出）の諸君らが組織していました。ある時その研究会で、賀川の処女作『貧民心理の研究』を河上先生から紹介され、私は非常な興味をもってこれを読み、深い感銘を受けました。…労学会の連中は、休暇になると、いつも賀川さんの神戸新川の貧民窟に押しかけたものです。

伊藤によると、高山は河上肇から社会主義思想を学び、また賀川豊彦の活動を知ったと云う。彼が、賀川を援けて一九二〇年以降に神戸に在って川崎・三菱造船所の労働争議に参画したのも、河上肇が導き手であったのである。

唐突ではあるが、高山義三の入営のトピックは、日本の軍国主義化に対して悲観的になっていた孫文に影響を与えたかもしれないのである。孫文は、『朝日新聞』記者の太田宇之助（一八九一～一九八六年）に対して日本陸軍内部への革命工作の展開を尋ねている。

おそらく、孫文は、邵力子を介して高山の一年志願兵のトピックを聞き知り質問したのであろう。[註11]

孫氏に反対する政客たちは、よく「孫大砲」と呼んでいた。大砲とはホラ吹きを意味するのだが、そのように見られたのも、孫文氏の偉大な理想主義を単に空想家扱いにしていたによるものだろう。ある日の会見中、孫氏から突然「日本軍隊に社会主義の思想は浸透しているのか」と聞かれたのには、私はびっくりした。全く聞いたことも、考えてみたこともなかったからである。私は「知らない」と答えるよりほかなかった。孫氏はやっぱり革命家であると、その時感じたものである。…。中華民国九年（大正九年、一九二〇）十一月、広東における政情が変わったので、孫文氏は上海を発って広東に赴き、軍政府を設け、大元帥の職についた。私が孫氏を現地に訪

ねたのはこの時代で、翌年の春のことである。…。大正十年三月、摂政宮殿下がヨーロッパへ旅立たれることになり、その最初の御上陸地が香港と決まったところ…、私に香港へ行けとの指令が本社から届いた。…私はこの仕事をすませた後、一人で広東へ向かった。孫文氏とのインタビューを試みるためであった。

太田が、孫文と会談した時期は明確にされてはいないが、一九二〇年以後のことの可能性が高い。その上で、孫文の言葉が、高山義三の入営を示唆したものならば、やはり謝晋青が邵力子に報告した情報が孫文の耳に入っていたのではなかろうか。

また、孫文は、革命同士で当時東京中国人ＹＭＣＡ主事（任期一九一八～二二年）であった馬伯援（一八八四～一九三九年）からも、同様な情報を得ていた。

例えば、孫文と馬伯援との談話には、次のようにある。[註12]

（一九一九年十二月一日）　孫謂伯援曰：你初自日本帰、知道日本近況、請你報告。伯援乃将日本軍縮運動及其民主思潮為孫文詳述、孫曰：“如是方好。恐怕他們的国民不能如此覚悟、但吾人対日本無多大希望、只求其不行劫可也。”

さらに、高山義三の入営に関しては、日本の社会主義者の間でも関心をよんでいる。日本共産党の古参幹部の堺利彦も注目していた。[註13]

高山義三氏は京都大学の出身で、友愛会京都支部を守り立てた人である。氏の父君は曽て衆議院議員になった事があり、最近には同志社大学の総長代理を勤めた事もあり、兎にかく京都における有力な名士であり、長老である。…。高山氏は今、やっと一年志願兵の服役を終わって、之から新活動に入ろうとしている所である。京都のみならず、大阪神戸に亘る関西の労働運動が、今後氏に依ってどんな影響を与へられるかは、可なり重大な問題である。敷衍して、謝晋青が、見方によっては軽率な行動ともとれる高山の入営に着目し、それに態々ナロードニキ的な文飾を施して邵力子に伝えたのも、親交があった堺利彦の見方と似通っていたからではなかろうか。また、その話に孫

文が眩惑されたのも宜なるかなである。

第二章　軍服を纏って行進した労働者達

堺利彦は、コミンテルンが結成された一九一九年三月から五カ月後の八月三〇日に開催された友愛会の第七周年大会から労働組合に顔を見せるようになる。[註14]

その前年、堺利彦は、「大日本労働総同盟友愛会」の名称を蔑み「大」の字義には帝国主義的な臭いが漂っていると批判している。[註15]

しかし、謝晋青が、一九二一年七月の『民国日報』に発表した神戸川崎・三菱造船所の労働争議の第一報は、堺利彦等の社会主義者が「反動的」「階級意識の欠如」と貶めた友愛会への批評を一掃するものだった。[註16]

本年所起的労資争端、大多是実行罷工、而僅出以怠業挙動的、尚在其次。…。日本労働運動底趨勢、是天天不同的。佢們一般労働者、対於階級戦争底意義、亦都很能了解。…這個話、在日本工人們底脳中、幷不是什麽夢想；実現的早晩、不過是個時間底問題罷了、佢們現都正在努力着呢。現在不向下多写了、専待写川崎工人等占領工場事件底結果罷！

七月十五日　在東京

一九二一（大正一〇）年七月に入り、神戸川崎・三菱造船所の労働争議は、経営者側が労働者の要求を頑なに拒んだため、武力衝突間際の一触即発の危機に瀕していた。さらに、川崎社長の松方幸次郎は、争議団との交渉を恐れて訪欧した。結果、労働者の団結心は強まり、一万数千人の職工が罷業・示威運動を展開した。

そのなかで、有吉忠一兵庫県知事・桜井鉄郎神戸市長は、川崎造船所での建造中の軍艦の就航の遅延に関する海軍軍部からの突き上げに慄き、争議の暴徒化への善後策と称して姫路の連隊の派遣による武力制圧を画策した。

これに対し、争議団は、労働者が秩序正しく示威活動を行っていることをアピールするため、職工中の在郷軍人（退

役軍人）に軍服着用を命じて、軍人精神に沿った隊列行進を官憲に見せつけて世論を味方につけた。

謝晋青は、この軍服姿の労働者を革命軍（階級戦門底模範軍）の誕生、その示威活動を「階級戦争」つまり“階級闘争”と論評した。謝晋青が記した記事を時系列に列記すると、七月二四日に東京からの送信として『民国日報』（八月二日付）の「日本工人占領工場底前後」（続）に、七月一七日の摩耶登山で軍服を纏って行進する状況が紹介されている。[註17]

▲　職員技師不得入工場…。川崎工人占領工場和示威遊行等、極有秩序、而行動亦極厳整、堪称階級戦門底模範軍。所以友愛会為欲使此模範軍底陣容逼傳全国、特将各節撮為活動影片、分送全国労働団体、巡廻開演。…。

▲空前的大示威　七月十日、神戸各労働団体挙行大示威遊行。参加示威隊的団結、有：電正会（軍楽隊在内）、…前軍楽高奏、後和以労働歌、由神戸市山上山下、進行示威。

また、二日後のコラム欄「工場管理」には、次のように報道している。[註18]

▲工人大開運動会

三菱川崎工人、雖遭此強圧、仍不屈服。示威列隊不進行、則集議開工人運動会。…工人中隷籍予備兵後備兵的、有四千余人、在開運動会時、此種予備後備各軍人、也把各人底軍服穿起、以與当局底軍隊相対応。他們以為資本家有政府底軍警、調來嚇人、而工人自家亦有自己底軍隊、出来和他対嚇；這也是一件趣事。　（赤軍・紅軍？）

謝晋青は、労働者の示威活動の様子を「階級戦門底模範軍」（階級闘争の模範的な軍団）と表現し、ソビエト政権誕生での労働者・兵士で組織された「赤軍」のように語っている。

しかし、川崎造船の電正会に軍楽隊が組織され、その奏楽を先頭に行進が行われたとも記しているが、その電正隊の行進のお手本“かたち”は、多分に救世軍が街頭伝道を行う際に軍服姿で市内を練り歩く形態と似通っているように想定される。

さらに「運動会」での出来事であると断っているが、在郷軍人の労働者の軍服姿を革命軍の創設であると讃えて、終わりに「趣事」（まさに興味深い話だ！）と締め括っている。只、彼はその軍服着用の経緯については何一つ触れ

ていない。

一方、「帝国在郷軍人会神戸支部長・陸軍歩兵大佐納富広次」（『復刻版　三菱川崎労働争議顛末』）によると、事実経過としては、労働者の中の在郷軍人の軍服着用に対して、現役軍人からこれを思いとどまらせようとする説得工作が行われていた。[註19]

川崎職工の行政長蔵氏等が発議して此の際罷業職工中の在郷軍人三千余を糾合し之を一隊となし、尽く軍服着用軍隊精神を以て職工の秩序維持に力めしめ、且つ一種の対抗的気勢を揚げるという噂があるのに対し、同司令官は其の席上此の際在郷軍人の軍服着用につき左の注意を与へた。

在郷軍人の軍服着用は軍人の一特典にして之を着用すべき場合は閣令を以て定められあり、乱用すべきものに非ず。…軍服着用中の行動の如何は陸軍刑法懲罰令等の制裁を受くるに至ることあり。従て之が着用は特に熟慮あり度し。

七月十六日川崎・三菱造船所罷業団の運動会二日目は二万七千余の職工団が大挙して摩耶再度の登山遠足会を催すべく…午前八時頃から各々集合地を繰出し登山の途に就いた。而も青やカーキー色の労働服の中に特に目立ったのは労働者の中にある在郷軍人の軍服姿で各兵種の上等兵や伍長などの肩章の肩を怒らして推し進む、殊に万緑叢中の紅一点とも見るべきは川崎電気工作部の女工連五十余名が美しく装ひ立って電正会の先頭に立って推し進んだことことである。

これに関して、隅谷三喜男氏は、『賀川豊彦』の文中で争議団が在郷軍人に軍服の着用を命じたことに論評を加えずに事実経過だけを紹介されている。[註20]

一方、竹村民郎氏は、「時代としての大正―軍服を着てストをした労働者」『大正文化』（講談社現代新書）において、労働者の軍服着用に対して歴史的意義づけをされている。

在郷軍人出身の労働者三〇〇〇人が、浅黄の労働服を脱ぎすてて、軍服姿になったことは、権力側に対して自分たちこそ真実の忠君愛国の士であることを表明したものである。彼等は軍服を着ることで、弾圧者たる軍人、憲

兵、警官の軍服、官服姿をニセ者として批判したのだ。労働者の軍服姿こそは争議団の正義＝精神的優位性のシンボルであった。三菱、川崎争議でとくに重要なのは、争議が日本の労働運動に与えた大きな影響である。三菱、川崎争議は一ヵ月以上も軍艦製造をストップさせた。…。この重大時局に労働者が国の護りのシンボルである軍艦製造を停止させたことは、日本帝国に対する反逆を意味していた。…神戸の争議には直接的な政治思想の影響はほとんど見られない。しかし国際労働運動との連帯、ロシア革命で労働者国家の成立が空想ではなかったという確信、こういったものが、三菱、川崎争議のもたらす政治的影響に加わって、日本の労働運動をより一層前進させたことは否定できない。

竹村氏は、労働者が軍服姿で示威活動をすることで、その労働争議が愛国精神に適った行動であることを宣言したものと評価されている。そして、竹村氏は、論点の中で「神戸の争議には直接的な政治思想の影響はほとんど見られない」、と指摘されている。つまり、神戸川崎・三菱造船所の労働争議の行動に外部勢力からの思想的影響はないと論じている。[註21]

しかし、筆名「労働宗一信者」という争議団の一人は、労働者の軍服姿の中に、彼等が階級意識に目覚め、資本主義と軍国主義に対峙し革命への決意表明をしたものとする手記「労働運動と在郷軍人」を『労働者新聞』に投稿している。そこには次のようにある。[註22]

我国の現在の状態の下に本気になって労働運動をする者は種々の誤解を受けます。併し私は国民の中堅を以て自ら任じ良民の模範となるべき在郷軍人たる地位を自覚する時に益々熾烈に労働運動をしなければならぬと思って居ります。私は現在軍隊で教えられた義勇奉公と云ふ観念の下に労働運動をして居ります。

そして現在に於て実際此の国を防ると云ふ事は、只に異人種に対し異民族に対して戈を執って戦うと云ふ事ばかりでは無いと思ふて居ります。併し世論にまどわず政治にかかわらず、只々各自の武職を尽くす事が軍人の本分である故に、其善悪は別として実際社会の問題となって居る事に手を出して、其渦中に投ずる事は御互に戒め

ねばなりらぬと思ふ。…

併し我倭民族の向上発展を阻害するものは、所謂外敵に非ずして、国内に充満する資本主義の経済組織其者でありまして、現在其組織を運用して王者に勝る生活を営むで居る、有産階級の豪奢なる生活と横暴を通過ぎた乱暴なる行為と、所謂王者を凌ぐ不遜なる行動は、光輝やく歴史を持った我倭民族をやがては亡国の民たらしむるものであると私は思ふて居ります。

この文章の筆者の署名は、「労働宗一信者」とだけあり名前が伏せられている。「労働宗」というネーミングから社会主義者であることが推測される。文面には、明確に労働者の敵は資本家であると論じられている。

これからも謝晋青が争議団の示威活動の様子を「階級闘争の軍団」と記したのは、あながち誤認とも言えない。だが、この様な論評は『労働者新聞』には稀である。

繰り返すが、在郷軍人が軍服を纏ったのは、争議団の暴徒化の阻止の名目で動員された姫路連隊の来神という特別な事情に対応したもので、あくまでも軍人の介入を阻止するためのパフォーマンス（performance）だったのである。

その真実性は、当時の『大阪毎日新聞』の報道を一瞥すると明らかになってくる。[註23]

「川崎の職工中在郷軍人四千の決議－憲兵隊から抗議が出る」

川崎の罷工団では、罷工職工中、予備・後備役に籍を置く四千名は、此際軍服を着て罷工団の運動（7月16日、17日は摩耶登山）に参加し、進んで罷工団の秩序維持に官憲及軍隊の力を藉りないで罷工団中の在郷軍人で自治的に行う事を決議した。

これに面食らった憲兵隊の石黒少佐は、十五日午後五時、新開地カフェー・ナンヨウで実行委員青柿善一郎氏及久留弘三氏と会見し、憲兵隊及軍隊の出動は陸軍当局と県知事と直接交渉の結果によるもので憲兵隊及神戸連隊区司令官は何等其議に参与して居ない旨を述べた後、此際罷工団職工中軍籍にあるものが軍服を着用する事は事の善悪如何に拘わらず中止されたい旨を申し出た。

青柿・久留氏は、「我々の運動は暴動ではない、寧ろ形勢悪化のため飽くまでも、暴挙を慎み在郷軍人が罷工団にある限り国士として馳せ集り、秩序的運動をして世上に模範を垂れ、延いては川崎造船所内にどんな事件が起こって官憲が出動しなければならぬ事になっても、それ以前に我々の手で納める為めに軍服を着用するものである」と語り、加えて「然し乍ら、憲兵隊としての意のある所は一応通じ置く」と約し立分かれた。

つまり、争議団幹部の青柿善一郎（一八八七～一九七五年）と久留弘三（一八九二～一九四六年）が、明確に軍服着用の意味がが示威活動での秩序維持にあると語っているように、官憲の軍服着用に対する見方が反政府的との主張を否定している。

また、賀川の側近の武内勝（一八九二～一九六六年）も、争議団の軍服姿を目の当りにして、次のような回想を残している。[註24]

スト実行側の中にはたくさんの在郷軍人があり、菜っ葉服ではなく軍服を着て参加したものです。姫路から来た軍隊はたくさんの在郷軍人がおるものですから、それを向こうに回して鎮圧するということはできないため、待機の状態であったのであります。

つまり、在郷軍人の軍服姿は、示威活動での官憲弾圧を眩惑する偽装工作で、竹村氏の見解や「労働宗一信者」が説く争議団の革命化への進展を目的としたものとは言えないのではなかろうか。

そもそも、軍服着用を指令した参謀の青柿善一郎・行政長蔵（一八八七～？）は、神戸新川に設けられていた賀川豊彦のイエス団教会に属するキリスト教徒で反共主義者である。とりわけ、救世軍の軍服姿は、身分制への抵抗の表現であった。

先述したが、労働者が開催した運動会で、川崎造船の電正会に軍楽隊が組織され、その奏楽を先頭に行進が行われたが、その隊列の手本、かたち、は救世軍が街頭伝道を行う際に軍服姿で市内を練り歩く形態を真似たものではなかろうか。

その証に、賀川は、救世軍の川崎・三菱造船所労働争議での健闘ぶりを、一九二七年に上海で開催された基督化経済会議での講演で触れている。[注25]

…。当我在東京做救済工作時、共産党在工会中乗機做破壊的工作、在農会中他們要削除四個領袖。三個基督教徒（kagawa、Sugiyama、Yukimasa）和一位非基督徒。（yukimasa）是一個工人。在神戸因他的活動、失去船場工作後、便很熱烈的坐脚踏車営磨剪刀的工作。到各処専事組織工会。我們不告訴他們我們是基督徒。他們信託我們。救世軍的人員亦往各郷鎮去做工会的領袖。共産党因欲従他們機関中革除基督徒。所以我們祇可與他們分離。他們用暴力反抗対待我們。我們却用忍耐応付。

とりわけ、「救世軍的人員亦往各郷鎮去做工会的領袖」と、賀川は救世軍の労働組合（工会）に対する指導的役割に感謝している。救世軍は、その宗教的活動において労働運動を指導することはなかったが、会社側に解雇された職工の生活支援に助力したと思われる。また、賀川が告白しているように、救世軍は各都市の労働組合の指導者とも連絡していた。

敷衍して、謝晋青は、労働者の軍服姿での行進に革命軍の進軍の有様を想定しているが、これは事実誤認である。賀川等が軍服を着用させたのは、官権との武力衝突を回避し平和的に示威活動を展開するためのカムフラージュ（camouflage）であったのではなかろうか。

第三章　労働者の工場管理と「工場占領」

賀川豊彦は、神戸の争議団を代表して会社側と交渉した際、労働者による工場管理を申し出ている。工場管理という言葉の響きから、労働者が生産手段の工場を資本家から掠奪するかのようなイメージを懐かせる。そこには、階級闘争の社会主義革命を連想させるが、実は賀川は、資本家と労働者とが連帯責任制で工場の運営を行う方式を提案し

たのである。

隅谷三喜男氏は、この組合の新戦術「工場管理」について、賀川が『労働者新聞』（大正一〇年七月二五日付）に記した言葉を引用して「産業管理は暴力による工場占領ではない。一産業に従事する全労働者の合意的決議による建設的企画である。」と紹介している。[註26]

それは、賀川の年来の主張であった。すでに一九一九（大正八）年秋に「工場の組合管理」を説いて、「工場の管理だけはせめて職工の自治体である組合で管理したいものである」と語っている。[註27]

賀川は、神戸での労働争議の二年前、一九一九（大正八）年の『労働者新聞』（七月一五日付）に「社会連帯責任」を投稿している。そこには、「社会は凡てのものが連帯責任で行かねばならぬ」と論じられている。彼は、工場の生産量・労働賃金・労働時間等を経営者と労使が連帯責任のかたちで運営していく理論を披瀝している。[註28]

そもそも、賀川の「社会連帯」の理論的根拠は、彼独自の『聖書』解釈から編み出された「連帯責任」（労資双方の連帯責任）に淵源している。彼は『聖書社会学の研究』（大正一一年刊）において、「社会連帯責任」の精神をイエスの社会法則と説いている。[註29]

イエスの権力階級に対する態度はかなり無頓着なものであった。…。イエスは、社会連帯の責任について常に考へておられた。…。この社会連帯の考こそ実にイエスの社会組織の根本法則である。

また、賀川は、『聖書社会学の研究』において、「我々は、心的準備がないのに必ずしも即刻に社会階級を破壊する（階級闘争）必要は無い。」とまで記している。[註30]

要約すると、賀川の「社会連帯」の思想は、マルクス主義の資本家と労働者の対立構図を、〝労使間に霊的区別はない〟として異次元の精神世界にまで引き下げて労資協調を見直し、それから資本家と労働者との共存関係を構築し、延いてはマルクス主義の階級闘争理論を否定することにあったことは明白である。

しかし、神戸川崎・三菱造船所の労働争議の敗北によって、労働者は階級意識に覚醒し「普通選挙」の議会主義の

原則に則った労働者階級の国政での発言の平和的伸長を期するのではなく、直接資本家を暴力革命で打倒し社会変革を期する動きが生まれていた。[註31]

前年（一九二〇）労働者階級の普選運動を支持した堺利彦でさえ、一九二一年三月には、「今の日本の社会主義者としては、普選運動をやらない所に威力がある。やらない方にヨリ多くの効果がある」と態度を一変した。…。いかに当時の社会主義者たちが革命近しのムードに酔わされていたかの一つの証拠でもあった。

当時の日本の社会主義者は、「革命近し」の雰囲気に酔っていた。大杉栄が、一九二〇年一〇月に訪滬し、コミンテルン関係者と交流したことは周知のことである。また、謝晋青も同様な革命の予感を感じていた。

とりわけ、謝晋青は、「革命近し」の雰囲気を真に受けていたようである。彼は、『民国日報』（八月一日付）「旅東随感録」において「工場管理」を、態々「工場占領」と改め、賀川の意図を曲解させて報道している。つまり、彼は「管理」を「占領」に置き換えることで、労働者が階級意識に目覚め工場を直接支配する実力行使に至ったと報じているのである。[註32]

但就工人能占領工場一事、足證日本工人、已有很高的覚悟了。…日本工人、今日覚能以自己底力量、奪回自己血汗結晶底工場、這実是一椿快事。

また、謝晋青は、『民国日報』（八月一日付）の「日本工人占領工場底前後」のなかで、「工場管理」に革命的性格を着色するため、労働者の罷業によって軍艦製造に遅滞が生じ、それによって海軍にダメージが加えられたと報道している。[註33]

工人占領工場、在西洋首現於意大利、而為労働運動鼻祖的英国工人、至今還未試行、不料在東洋労働運動幼稚的日本工人、現在竟歩起意大利工人底後塵。神戸三菱川崎両造船所、都是前月末開始運動罷工的、自罷工至占領工場以迄現在、已近一月、而尚無解決的希望。無論他那占領工場底意義如何（和意大利占領工場性質、当然有些不同）、並其将来的成敗如何、而在東洋総不能不算一件有声有色的事情呀。所以我先把彼前後経過的情形記出来、給国内

労工弟兄姉妹們看看、至於批評、…。

▲　海軍省底憂慮

川崎工人占領工場、因佢們工人並未擾及市面治安、所以当地警署尚未十分干渉。雖在示威隊中、拉去激烈職工数人、但示威遊行、仍未禁止。

　川崎罷工、最掛心的是海軍当局。因為川崎造船所承攬海軍省建造兵艦、合同上訂明本年十月包船進水、若罷工風潮拡大、那在予定期内一定不能成功了。茲将其承造船数列左…

戦艦加賀一隻　戦艦大井一隻　巡洋戦艦常盤一隻　巡洋戦艦鬼怒一隻　潜水艇五隻、駆逐艦一隻　砕氷船一隻

又潜水艦七隻、駆逐艦二隻

兵艦不成功、在罷業職工本不以為有什麽関係・、但在拡張軍備一日不可或緩的軍閥看来、實在大為不了。所以地方官不干渉罷工、而海軍当局、到要想加以干渉了。…。

▲　空前的大示威

七月十日、神戸各労働団体挙行大示威遊行。参加示威隊的団体、有：

電正会（軍楽隊在内）、川崎造船造機造罐各部、三菱造船造機印刷各部、友愛会支部等

共三万五千人、排成十里大隊。前隊軍楽高奏、後和以労働歌、…。這次示威、拠総参謀賀川豊彦向人説、秩序厳整、不但日本従古未有、即在英美亦不多見、由此亦可知其価値了。

謝晋青は、労働争議による操業停止を、当時、川崎造船所で建設中だった戦艦・巡洋艦・潜水艦等の海軍艦艇の製造への妨害行動と結びつけている。あたかも、労働争議を通して、労働者が軍隊と対峙した構図を設定し、ストライキに対して反軍国主義的な脚本を演出しているのである。

　周知のように、日本の軍事力は、二〇世紀に入ってからは世界の脅威になっていた。第一次世界大戦以後、日本の陸海軍は英米にとっての脅威であっただけでなく、隣接している中ソにとっては一層危険な存在になっていた。

松尾尊兊氏は、レーニンの日本革命観の核心が軍国主義の打倒にあったことを指摘されている。また、松尾氏は、一九二二年一月二一日の極東勤労者大会において、レーニンが日本の代表の吉田一と田口運蔵に対し、「日本の軍国主義を打倒するに非ずんば、印度の独立も支那朝鮮の民族運動も単なる地方的騒擾に過ぎぬであろう」と語ったことを紹介されている。[註34]

中国共産党の指導者張太雷（一八九八～一九二七年）も、第一次世界大戦以後、日本が軍事大国に成長し、朝鮮半島を越え中国華北へ侵攻を謀っていると警戒心を披瀝している。[註35]

第一次大戦以来、日本和英美一様、已経成為強大的帝国主義国家。…。日本帝国主義的崩潰、就是世界三個資本主義支柱之一的倒塌。

つまり、謝晋青は、神戸川崎三菱造船所の労働争議を、中国にとって最大の脅威であった日本軍国主義に対して労働者が敢然と立ち向かった革命的な行動と評価し、それを日本人民の社会主義革命の壮挙であると大袈裟に表現し『民国日報』に寄稿しているのである。

結語　謝晋青の論説から読み取れるもの

謝晋青の論調は、革命劇風に粉飾されている。彼が、筆先から産み落とした〝日本の革命近し〟と云う雰囲気は、孫文・李大釗・邵力子に日本の社会主義が成長し革命に向かっているとの期待を懐かせた。なかでも、謝晋青が、論説の中で高山義三の入営を軍隊への社会主義思想の宣伝工作、労働争議の示威活動での労働者の軍服姿を「赤軍」の創設、工場管理を労働者による生産手段の支配と記したのは、読み手に取って衝撃的な情報であったであろう。

しかし、事実を検証すると、高山の入営は「労学会」に対する官権の「赤化」の疑念を払拭するための偽装工作、示威活動での軍服着用は救世軍に倣ったパフォーマンス、工場管理も賀川の「社会連帯」の思想による労資協調の提

案であり、謝晋青の記事は曲解報道である。

端的に言えば、謝晋青は、『民国日報』に友愛会員の反軍国主義的なトピックを特記し、神戸川崎・三菱造船所の労働争議の記事を革命的な用語で文飾させて、大正デモクラシー下の日本労働運動の躍動を〝大正維新の実現〟との文脈で素描している。

おそらく、謝晋青の記者としての使命感は、社会主義革命のプロパガンダ（propaganda）にあったのではなかろうか。『民国日報』が国民党の有力な機関紙であっただけに、国民党員に対しての日本で労働者が革命に立ち上がったとの〝知らせ〟は波紋をもたらしたであろう。憶測ではあるが、隣国日本での社会主義革命への予感が、国民党員と初期共産党員の間に三年後の第一次国共合作（一九二四～二七年）をもたらす心理的な伏線になったのではなかろうか。

註記

註1　陳来幸『邵力子と上海商界』一九九二年

註2　丸山幸一郎「神戸の労働争議を支那人は斯う見る」（『読売新聞』（大正一〇年八月一八日付）

註3　石川禎浩『中国共産党成立史』（岩波書店、二〇〇一年）四三五～四三六頁

註4　松尾尊兊『大正デモクラシー』（岩波書店、一九九四年）三一七・三二二頁

註5　『彭湃同志生平年表』（人民出版社、一九八一年）三三八頁

共産党初期の党員彭湃（一八九六～一九二九年）は、早稲田大学の卒業（一九二一年）の前年にコスモ倶楽部に入会している。彭は、日本の高津正道、大杉栄、堺利彦、近藤栄蔵等、無政府主義・共産主義者とも交流していた。その際、謝と面識をもったのではなかろうか。また、彭湃は、東京で開催されたメーデーにも参加したという

註6　石川禎浩は、丸山と李大釗との交友関係を指摘している。また、丸山が、大杉栄や堺利彦ら『主義者』と交遊し警察の要視察人に指定されたこと、日本の社会主義運動と連絡を保ち、李大釗の日本社会主義同盟加入の手引きしたことを明らかにされている（『中国

共産党成立史』、波書店、二〇〇一年）三一八頁

註7　「宣伝的模範」（原載一九二〇年一二月二日、『民国日報』〝評論〟）『邵力子文集』上冊（中華書局出版、一九八五年）四五五頁

註8　「高山君の入営」『労働者新聞』（復刻版・大前朔郎編、日新書房、一九六九年）（大正八年一一月三〇日付）

註9　「学生と労働者」『新神戸・労働者新聞』（大正八年二月二〇日付）

註10　「スラム街のクリスマス」『百人の賀川豊彦伝』上巻（キリスト新聞社、一九六〇年）八七～八八頁

註11　太田宇之助「孫文と私」『中国と共に五十年』（鷹書房、一九七七年）三六頁

註12　「与馬伯援的談話」『孫中山全集』（中華書局出版、一九八五年）第五巻一七〇～一七一頁

註13　堺利彦「友愛会の人々―『改造』より転載―」『火事と半鐘』、三徳社、大正一〇年七月刊）一四六～一四七頁

註14　『労働者新聞』（大正八年九月一五日付）に掲載された「第七周年全国大会出席の記」に、「堺枯川といふ、我が国社会主義者の重鎮が何思ったのか一日も二日も来て熱心に傍聴していた」とある

註15　岡義武『転換期の大正』（岩波文庫、二〇一九年）一九五頁

註16　「日本近年年間的労働問題」（三）『民国日報』（一九二一年七月一五日付）

註17　京都大学人文科学研究所蔵『民国日報』（一九二一年八月二日付）副刊『覚悟』「日本工人占領工場底前後」）（続）

註18　『民国日報』（一九二一年八月三日付）

註19　「帝国在郷軍人会神戸支部長・陸軍歩兵大佐納富広次」『復刻版　三菱川崎労働争議顛末』（三栄書房、一九七二年）八六～八八頁

註20　隅谷三喜男『賀川豊彦』（日本基督教団出版部、一九六六年）一一二頁

註21　竹村民郎「時代としての大正―軍服を着てストをした労働者」『大正文化』（講談社現代新書、一九八〇年）一八〇～一八二頁

註22　「労働宗一信者　労働運動と在郷軍人」（『労働者新聞』、大正一〇年九月一八日付）

註23　「罷工団の運動に軍服姿で参加」（『大阪毎日新聞』、大正一〇年七月一六日付）

註24　「イエス団の使命」『賀川豊彦とボランティア』（神戸新聞、二〇〇九年）三〇四頁

註25　「日本社会運動」『基督化経済関係全国大会報告』（中華全国基督教協進會編、民国一八年九月）

註26　隅谷三喜男『賀川豊彦』一一〇～一一一頁

註27　『労働者新聞』（一九一九年九月一五日号付）

註28　「社会連帯責任」『労働者新聞』（大正八年七月一五日付）

註29　「イエスの社会学及社会運動」『聖書社会学の研究』（日曜世界社、大正一一年、昭和三年『聖書の社会運動』に改名）『賀川豊彦全集』第七巻、五六頁

註30　『賀川豊彦全集』第七巻、七五頁

註31　松尾尊兊『大正デモクラシー』第八章、二七二～二七四頁

註32　『民国日報』（一九二一年七月二〇日付）副刊『覚悟』「旅東随感録」

註33　『民国日報』（一九二一年八月一日付）副刊『覚悟』「日本工人占領工場底前後」）

註34　松尾『大正デモクラシー』第八章、二七二頁

註35　「在共産国際第三次大会上的演説」（一九二一年七月一二日）『張太雷文集』（人民出版社、一九八一年）一～三頁

補註　水羽信男氏は「ある中国共産党員と大正期の東京」（『近代中国と日本』御茶の水書房、二〇〇一年）において、謝晋青の『覚悟』での報道を分析されている。そのなかで神戸川崎三菱造船所の労働争議の記事の存在を紹介されているが、考察されてはいない。